

サアデット・アブドラエヴァ
芸術学博士・教授

アゼルバイジャンの楽器は 世界を征服する

アゼルバイジャンの楽器は民族の財産と文化の重要な担い手でありながら特色ある外観と音で秀いる。



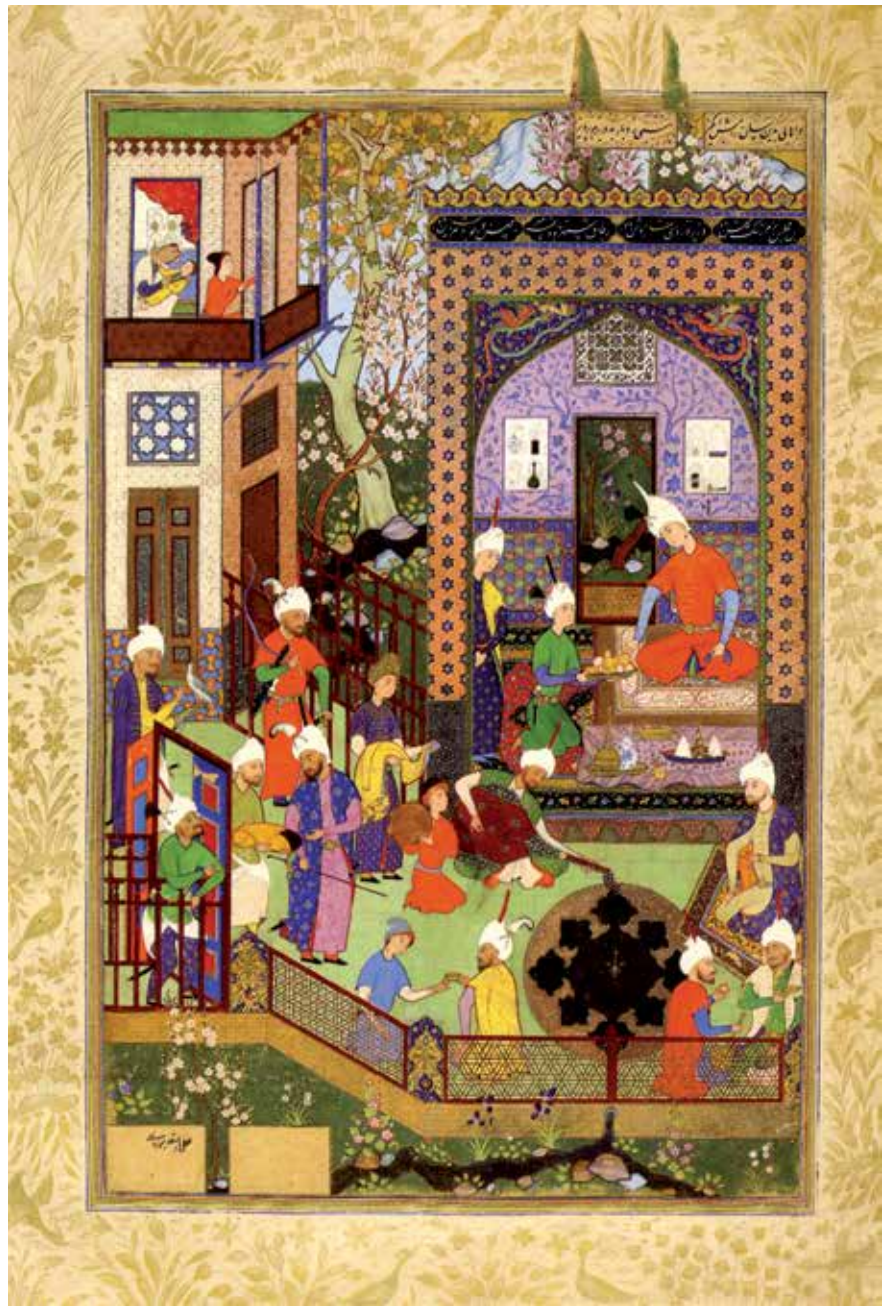
ユニークな岩刻壁画で有名なゴブスタン国立保護区の近くに「ガバル・ダシー」があり、その上に石打撃で原始人の踊り儀式が従われた。古い家庭用品に異なる楽器の描写はアゼルバイジャンの様々な地方に行われた考古学上の発掘の時に発見さ

れた。このすべてのデータは描写の古代の起源について証明している。最初から原始的な楽器は時がたつと完全になりつつ我々が今これらを見るような形で、現代まで改善されてきた。または、それぞれの演技者は手に持っている楽器を自分の「

財宝」、自分の「誇り」だと思う。楽器の組み立てや音響に基づいて民族の音楽思考、その美的なセンスについて判断することができるのである。それらの各々が社会的・文化的・精神的な要求に応じて創造されたわけである。

物質的な文化の記念碑、歴史記録、中世の音楽学者の学術論文、民間伝承芸術のサンプル、詩の古典作家の作品、中世の書物ミニチュア、壁画、旅行者の原稿及び博物館の様々なコレクションはアゼルバイジャン領土に異なる時期に90つまでの楽器の普及について証明する。

音の発生源とその引出方法を考慮する採用された分類体系に応じて32つの弦楽器の中で26つは撥弦楽器だった（サーズ、アーガヌン、バーバット、ゴプーズ、タンブール、タール、ダンプール、ドンガール、カーヌーン、ムグニー、ヌズハ、オザン、ルバーブ、ヌズハット、ルード、ドタール、セター、チャータル、パンジャタール、シェシタール、ウード、チェヘスデーフ、チョグール、角のチェング、シェシタイ、シェシハナ）。楽弓サブグループにケマンチャ、ケマン、チャガナーグ、チャガネが入っていて、サントールとチェングはスティックの打撃によって発音した。23つの管楽器の中で9つは金管楽器サブグループに入っている（ネイ、クサー



ル、トゥテッキ、ヤン・トゥテッキ、ナイ、ムシガール、ミズマール、ケレナイ、ブーブグ）。木管楽器サブグループはシュンスー、バラバン、シュンスー・バラバン、ツルム、トゥルム、ズルナ、アルガン、シャプビ

ールから成っていて、マウスピースサブグループはブググ、ブーグ、ガフドゥーム、カラナイ、ネフィール、シャー・ネフィールとシェイプールから成っている。16つの膜鳴楽器中で11つは片面で（ガワール、ゴシャ・ナ

ガラ、ダイラ、デーフ、ジフト・コス、ドゥンベック、コース、マズハール、ナガラザン、テビール、テビール・バス)、5つは両面であった(ダウール、ドフル、ドゥンブール、ナガラ、タビレ)、すなわち片面か両面から皮革製の響板で覆われた。16つの体鳴楽器の中で11つは打奏体鳴楽器に(ガシゲッキ、ゼング、ジーリ、ジンギロフ、カサ、ラッグチー、シンジー、テシト、チャン、チェレス、シャー・シャー)、5つは摘奏体鳴楽器に(グムロー、デライ、カマン、サファイール、ハルハル)、アギーズ・ゴプーズは吹奏体鳴楽器に属している。その他に、サイズによっては楽器の様々な種類があった。大きいサイズのサーズは「バシ・タワール」それとも「アナ・サズ」、中サイズは「タワール」、「オータ・サズ」及び小さいサイズは「ジュレ」、「バラ」、「キチック」サーズと名付けられた。ズルナの異種は次の順序で立った:バシ・タワール、ジュレ、オータ・ジュレ、アヤグ・ジュレ。大きいボディを持っているナガラは

「コース」、中サイズの「ゴートゥグ・ナガラシー」、小さいのは「ジュレ」と呼ばれた。

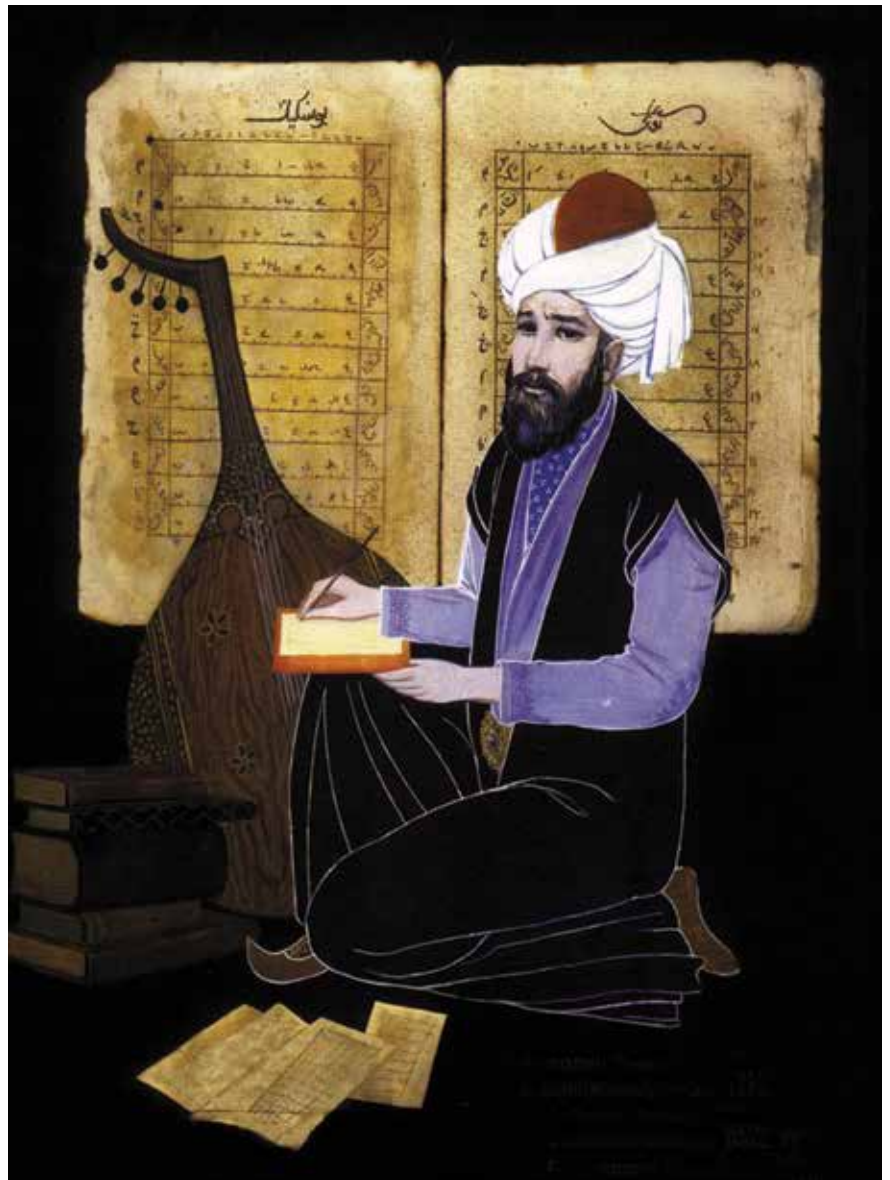
上述した所によりアゼルバイジャンにおいては弦楽器がもっと普及されていたことが分かる。そんなことはムガム、アシグメロディと歌曲の音楽ジャンルの演技の際主にその楽器の使用につながっている。現代では弦楽器の中でタール、サーズ、ガヌン、ウード、ダブールとケマンチャだけ使われている。他は歴史にわたって忘れられ、順不同になってしまった。共和我が国における音楽文化の発展のために都合のいい事情のおかげで回復に対して関心が起きた。そしての方向で既に具体的な措置がとられている。このように、ウゼイル・ガジベイリーの名のバクー音楽アカデミーに開設された「昔の楽器の回復と改善」という研究所ではメジヌン・ケリムリーの指導でルード、ルバーブ、チェング、バーバット、ゴプーズ、チョグール、チャガナーグ、シルワンのタンブール、サントウール、ヌズハが回復され、主要なことはこれらに基づい

て古代の楽器アンサンブルが創立された。アゼルバイジャン国立コンセルバトワールにある「国民楽器の改善」研究所に(指導者のアッバスグル・ネジェフザデ)バラバンの家族(バス、テノール、ピッコロ)、バスのケマンチャとサントウール、ガヴドームと半音段のラグッチやコースが作成された。時間を過ぎてこの楽器の多くは伝統的になると違いない。

現代では撥弦楽器の中で最も広げられていて鳴り響くのは865~890ミリメートルの長さを持っているタールである。タールは表面から8の字形に似ているボディ(チャナーグ)、頸部、頭と糸巻きから成っている。ボディは桑属、頸部と頭はくるみ、糸巻きは梨木から作られる。ボディの片開きである響板に有角家畜の心膜それとも鯰の胸部の皮が伸ばす。タールは19世紀後半この楽器妙技の演奏者とムガムの博識家である民族の間サディーグジャンと知られているミルザサディーグ・アサドオグリー(1846-1902年)によって改善された。彼の仕事の前に6つの弦を持った。彼はまず

弦の数を18まで増えて、後で13に縮小した。アゼルバイジャン音楽の17段階のフレットピッチに応じてネックに以前のように28つのフレットではなくて、22つに減少した。その他に、ボディの形を変更して、その重量を軽くした。以前には演奏の時タールが演技者の膝にあっても、今は楽器を胸レベルで持つ可能になった。そんなことよりタールの技術能力が増えた。このような楽器は非常に速く全コーカサスで有名になって、「アゼルバイジャンのタール」として知られた。

サディーグジャンの後タールは今のようにもう11つの金属弦であった。それらは相対的に三つのグループに分かれた。第一グループは白色（アーク）と黄色（サリー）のペアの旋律的な弦から成っていた。第二グループは3つのバス（キョーキ）の弦から成っている。第三グループは2ペアの有声（ジンゲネ）の整除する弦から成っていた。右手の2つか3つ（たいてい）の指の間に位置する撥（ミズラブ）がボディの大きな皿の真ん中に弦で打たれる。タールの技術と



芸術的な能力は特にムゲームのソロ演奏の際よく現れた。この場合は様々な撥細線と方法が使われる。

擦弦楽器のもう一つの有名な楽器はくるみの木から彫られた球状のボディを持っているケマンチャである。そのボディの開放側に牛の膀胱皮が張っている。この楽器の全長

さは金属棒と一緒に700～800ミリメートルまで達する。ケマンチャは異なる厚さの4本の鋼弦がついている。ネックにフレットが存在しない。バイオリンと違って演奏の際演奏者は楽弓の方向に応じてケマンチャを回す。普通はケマンチャがタールと共にサザンでというアンサンブルの中で響い

て、ここにまたガワールと演じる歌手のハネンデ、タールとケマンチャの演奏家が入っている。メロディアスで柔らかい音で異なっている。

サーズはダスタン（叙事詩）や旋律、民間話の語り手であるアゼルバイジャンのアシューグの常に離れない楽器である。サーズのボディはクワ属の木から作られるリベットから組み合わせて作られる。響板が同じ木から鋸で引かれる。アシューグが通常演奏するタワール・サーズの長さは980センチメートルに達し、テゼネという撥で打たれる11本の金属弦を持っていて、さて共振器の数は14-18となっている。異常に響き渡る音を持っている。

前世紀の後半から非常に有名になったのはウッドとカーヌーンである。ウッドは大きくて凸面でなし形のボディ、フレットなしの短いネックと後ろに折り返された糸巻きの頭を持っている。弦楽器の響板を除いて、楽器の木製部品の作るのにクルミの木を使用する。響板がトウヒ属それともマツ属から作られる。ウッドの長さは490-500

ミリメートルで、広さは350-355ミリメートルで、深さは180-200ミリメートルであった。11本の弦を持っていて、5コースは複弦で、6コースの場合は一般に最低音の弦のみは単弦である。柔らかな音で異なっている。とても優美な響きを持っているカーヌーンはすずかけの木から作られる長方形・台形の平板ボディを持っていて、そのサイズは800-900 x 370-400 x 50-60ミリメートルで、その上に24本の3重ガット弦が張っている。ボディの下部に皮革製の隔膜が張る。人差し指にはめられる指貫である撥で演奏する。

2弦のダンブール（タンブール、トンプール）は下部に向かって3か4歯で終わるスコップ形のようなボディや比較的短いネックや頭からなっている。ネックには5-7つの木造のフレットが位置している。楽器の全長さは約800-1100ミリメートルである。音が指の速い打撃で引き出される。

吹奏楽器の中で最も知られているのはズルナーとバラバンである。もしズ

ルナーは異常に優しい音を持っていても、バラバンは鋭い音を持っている。バラバンの成分は300-350ミリメートル長さの管、マウスピース、首輪とキャップである。普通のアンズの木から作られた管に演奏のために8つ（一つは背面に）の穴が開けられている。

ズルナーは大体クルミの木から作られ、下部に広げる370-400ミリメートル長さの管から成って、小さなマウスピースと真鍮のブッシュが付けられる。ボディに8つの穴が開けられている。演奏の時演奏者の唇がタガラックと呼ばれる丸い板に寄りかける。

その他に、吹奏楽器のトゥテーキとネイが有名である。トゥテーキは通常ダンチク属から作られる280-350ミリメートル長さの空虚な管である。木造のもある。その表面では演奏のために7つの穴と背面に1つが開けられている。斜めに切られた上部に笛装置が付けられている。550-600ミリメートル長さのネイも樹木か銅から作られる空虚な管からなっている。その表面には穴

が6つで、頭部に近い背面には1つがある。

アゼルバイジャンの西の地域であるナヒチェヴァン自治共和国に290ミリメートル長さのブッシュから成っているトゥルームズルナーとトルグズルナーは人気がある。管に6つの穴があるダンチク属と450 x 250ミリメートルサイズのワイン用皮袋から成る2つの旋律的な筒（210ミリメートル）が付けられる。または、管の中が演奏者の短い休憩の間楽器の響きを続く空気で満たされる。

指定の楽器のリズミカルな伴奏によってガワール、ナガラー、ゴシャ・ナガラー、ドゥンベークのような打楽器、または気鳴楽器のシャー・シャーとラグッチ（ラグットゥ）が供給される。

ガワールは310 - 320ミリメートル直径で40 - 60ミリメートル広さの曲がった狭い側板（サガナグ）で片側に魚肌張りが張る。側板の内側で周囲に沿ってがらがらリングが付けられる。音が端か隔膜の中央に両手のひらと指の柔らかい打撃で、もまた楽器の揺れることで引き出される。



ナガラーの330 - 360ミリメートル直径そして260 - 310ミリメートル高さある丸くて木造のボディが両側から山羊の皮が張っている。ナガラーを手および棒で引く。

ゴシャ・ナガラーは名前から分かるように（ゴシャはペアの意味をす）2つの300ミリメートル高さでサイズが異

なる木造のボディから成っている。それらの上部は200 - 280と110 - 180ミリメートル直径で肌で張っている。音が両棒がこのボディでの打撃によって引き出される。

ドゥンベークの開放側に350 - 400ミリメートル長さで直径250 - 260ミリメートルワイングラス形のようなボディ（たいてい



木造の)に山羊の皮が張る。演奏の時両手のひらと指で隔膜の端か中央に打撃を与える。

シャー・シャーは210ミリメートル長さの取っ手の上部と下部に縄で付けられる片側に丸くて凸面の75 x 58 x 15ミリメー

トルサイズで2つ木造の皿から成っている。演奏の際演奏者は右手で取って手を握りながら楽器を振ってその皿がお互いにつぶかるのである。

ラグッチはサイズで異なる、2つの長方形で平らな木製の角材から成

っている。大きい角材のサイズは251-255 x 120-125 x 47-30ミリメートルで、小さい角材のサイズは170 x 120-125 x 45ミリメートルである。それらの長辺には深い亀裂が彫られている。ラグッチを引くのに2本の棒が使われる。

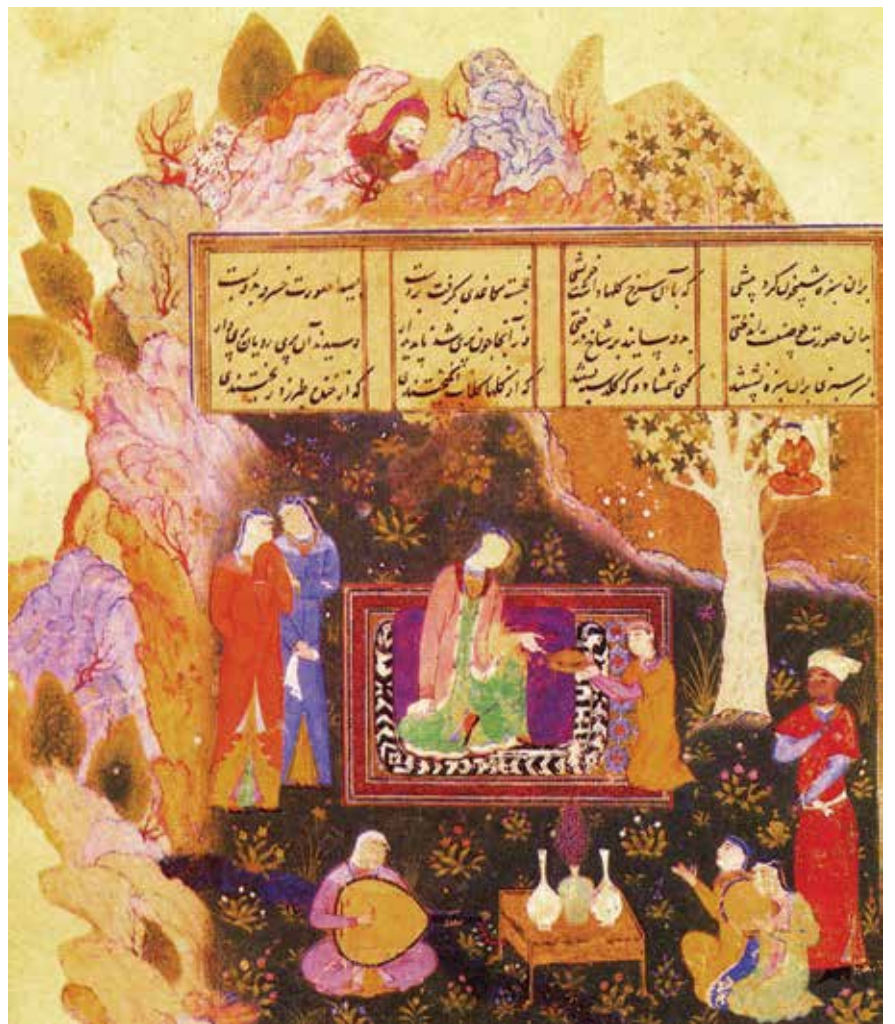
すでに長い間民族楽器のカテゴリーにクラリネットおよびアコーディオンが入っている。ロシアのアコーディオンと異なってアゼルバイジャンのアコーディオンは演奏のために右側に有鍵の鍵盤があつて、左側に「組版」の和音の代わりに調和した音を響かせるために右手で引き出されるボタン（ドゥイマー）がある。現代ではこのようなアコーディオンが「アゼルバイジャンのアコーディオン」こそ呼ばれる。柔らかくてメロディアスな響きのため特別に優待されるのは「ラ」音調（In A）のクラリネットである。

弦楽器、吹奏楽器と打楽器のグループに入る楽器は一緒にオーケストラやアンサンブルの中で響く。その他に、往時のように3重奏のアンサンブルが存在して、その中に

ハネンデ、タール演奏家とケマンチャ演奏家が入っていた。アシュエグアンサンブルの中にはバラバン演奏家が演奏し、シャマフ・サリヤーン地方には膜鳴楽器が有名であった。非常に人気あるのはバラバン、ズルナー、ナガラー演奏家のアンサンブルである。シェキ・ザガタラ地方にはダンブル演奏家のアンサンブルがずいぶん流行している。

ほとんどすべての楽器がソロパフォーマンスの時使われる。民族の間にタール、サーズ、ケマンチャ、バラバン、ズルナーとナガラーの演奏家は非常に人気がある。で、ガワールが属性として女性のダンスの際に使用される。

楽器の芸術・技術的な能力が、特別にこの楽器のために作曲された作曲家の作品に明らかに現れた。その中でガジ・ハンマメードフ、トフィック・バキハノフ、ナリマン・マメードフ、ラミール・ミリシリー、フランギーズ・ババエワ、マメドアガ・ウミードフとナジーム・クリーエフの交響楽団の伴奏でタールコンサートが優れている。



同じようなコンサートがセイド・ルスターモフ、スレイマン・アレスケーロフ、ジャンギル・ジャンギーロフによって民族楽器のオーケストラのため書かれた。交響楽団の伴奏でケマンチャのためのコンサートがザキール・バギーロフ、ガジ・ハンマメードフ、トフィック・バキハノフによって作曲され、室内管弦楽団の伴奏でのコンサートがアルビヤ・ラフメトワ

に作曲されたのである。あるいは、交響楽団の伴奏でカーヌンコンサートがダダシ・ダダーシェフによって、または民族楽器オーケストラの伴奏でアコーディオンコンサートがトフィック・バキハノフによって行われた。ナジーム・クリーエフにより民族楽器オーケストラと共にケマンチャの小曲が作曲され、スレイマン・アレスケーロフによって民族楽器オーケ

ストラと共にカーヌーンで「叙事詩」そしてダンスメロディーである「シヤラホー」が作曲され及びエリヤス・ミルゾエフにより交響楽団と一緒にネイで「神秘的なシンフォニー」が作曲されたということである。

伝統楽器が様々なジャンルで作曲された作品に聞こえる。例えば、スレイマン・アレスケーロフのタールとピアノでの「ソナチネ」と「スケルツォ」、トフィック・バキハノフの室内管弦楽団と共にタールとバイオリンで「ダブルコンサート」、セヴダ・イブラギモフの室内管弦楽団と共にタールで「思い出の詩」、アゼール・ルザエフの室内管弦楽団と共にタールで「思考」と「ガイタギー」、ラミズ・ゾフラボフのケマンチャとピアノで「モノロゲ」、ジャワンシール・グリエフの「アシグワーリ」という組曲やアルトとサズで「ソナチェ」やサズと吹奏楽器のカルテットで「ソナチネ」や「3倍合奏唱」（フレート、チェロとサズ）、サズでアシュエグメロディーのテーマのサイクル「小曲」、ラシード・エフェンデ

ィエフのピアノと打楽器、ラシード・シャファグの子供声合唱のためにサズで「アシュエグアリ・ババ」という歌・寸劇、アイディン・アジモフのサズ、声、タールとウッドで「アザーンの声」という声楽のサイクル、ダダシ・ダダーシェフのピアノとカーヌーンで「小曲」と「チナラの喜び」、オクタイ・ズルフィガーロフの「小曲」、「バラード」と「叙事詩」、イルハム・アブドラエフの小曲サイクルに現れたのである。アゼルバイジャンの器楽家はしばしば海外へ行って、我々の豊かな音楽文化をふさわしく代表している。外国人の聴衆が民族楽器に対して興味を示す例がたくさんある。しばしば自分自身もいずれかの楽器の演奏家になる。例えば、アメリカ人のジェフリー・ヴェーバフはムガムをタールとケマンチャで、ジェフリー・ウインボグはケマンチャで、またはフランスのリール音楽大学の教授マーク・ルピートはウッドで素晴らしく演奏していた。

大きな関心を集めたのは教授のシャヴァーシュ・ケ

リミによって行われたプロジェクトの範囲内でアゼルバイジャンとノルウェー器楽家の共同出演である。

現代では様々なアンサンブルと民族楽器のオーケストラがいたる所で聞こえる：宮殿、文化館、大学、クラブ、学校など。確かに国民楽器で演奏しないアマチュア演劇の団体の一つでも見つからないだろう。

我々のプロ器楽家の成功も疑いのないである。彼らの中で優れた人はアゼルバイジャンの音楽文化を世界の多くの国で代表している。我々は彼らが成功を勝ち得たのを賞賛して、彼らを誇りに思っている。◆

参考文献：

1. Абдулкасимов В. Азербайджанский тар. Баку, 19 (издан также на азербайджанском и английском языках) Абулдуールカシモフ『アゼルバイジャンのタール』第19巻、バクー（アゼルバイジャン語と英語でも出版された）
2. Абдуллаева С. Народный музыкальный инструмент Азербайджана. Баку,

- Элм 2000, 485 с. (издан также на азербайджанском языке)
 Абдраев 『アゼルバイジャンの民族楽器』、エルム編、バクー、2000年、ページ485 (アゼルバイジャン語でも出版された)
3. Abdullayeva S. Azərbaycan folklorunda çalgı alətləri. Bakı, "Adiloğlu", 2007, 214 s.
 Абдраев 『アゼルバイジャンの民間伝承における楽器』、アデイリオグルー編、バクー、2007年、ページ214
4. Abdullayeva S. Azərbaycan musiqisi və təsviri sənət. Bakı, 2010, 415 s.
 Абдраев 『アゼルバイジャンの音楽と造形美術』、バクー、2010年、ページ415
5. Bədəlbəyli Ə. İzahlı monoqrafik musiqi lüğəti. Bakı, "Elm", 1969, 246 s.
 Бадальбейли 『音楽モノグラフ詳解辞典』、エルム編、バクー、1969年、ページ246
6. Bünyadov T. Əsrlərdən gələn səslər. Bakı, Azərnaçr, 1993, 264 s.
 Буныядов 『幾世紀に
- もわたる声』、アゼルネシル編、バクー、1993年、ページ264
7. Əzimli F. Musiqi alətlərimizin adları "Oxu, tar..." Bakı, "Təfəkkür", 2004, 200 s.
 Азимли 『楽器の名前「タール、響け！」』、テフェックル編、バクー、2004年、ページ200
8. Əzimli F. Zərb alətləri Azərbaycanda. Bakı, 2008, 176 s.
 Азимли 『アゼルバイジャンの打楽器』、バクー、2008年、ページ176
9. Керим М. Азербайджанские музыкальные инструменты. Баку, Ени несл, 2003, 183 с. (тексты также на азербайджанском и английском языках)
 Керим 『アゼルバイジャンの楽器』、エニ・ネシル編、2003年、ページ183 (アゼルバイジャン語と英語に翻訳されている)
10. Кəрим М. Azərbaycan musiqi alətləri, Bakı, "İNDİGO" çap evi, 2010, 193 s.
 Керим 『アゼルバイジャンの楽器』、「インジゴ」という出版社、2010年、ページ193
11. Nəcəfzadə A. Azərbaycan çalgı alətlərinin izahlı lüğəti. Bakı, "Min bir mahnı", 2004, 223 s.
 Нəcəфзadə 『アゼルバイジャン楽器の詳解辞典』、「ミン・ビル・マフニー」編、バクー、2004年、ページ223
12. Nəcəfzadə A. Azərbaycan idiofonlu çalgı alətləri. Bakı, 2010, 279 s.
 Нəcəфзadə 『アゼルバイジャンのイディオフォーン楽器』、バクー、2010年、ページ279

